

受験番号					
氏名					

二〇二三年度 教育学部学士入試 問題用紙

「小論文」 国語国文学科

No. /

【注意事項】

- 必ず「問題一」「問題二」の二問とも解答すること。
- 解答はすべて「解答用紙」に記入すること。

【問題一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私はいつの間にか、何故であるか解らないが、強烈な日光のインドで私はライスカレーを食ふことを想像し始めてゐた。(略)

そこに行けば人生が強く輝いてゐさうであつた。

……！ そこに行つてカレーを喰べて、哀を吸へば、苦しみもなく死んで行ける。

(「或る自殺階級者」五〇ページ)

「インド」も「ライスカレー」も、モダニズムの時代ならではの異国情緒エキゾチシズムとなる表象だが、それよりも彼がい、という逆説めいたこの心情ゆえに、昭和初期に表れる「青空」には「自殺」のイメージが重ねられていくから

らだ。この心情は(サラリーマン)だけでなく彼らの傍流である「蒼白きインテリ」たちにも共有されていた。例えば、水谷津が探偵雑誌「新青年」に発表した「空で唄ふ男の話」(一九二七年三月号、博友社)が挙げられる。江戸川乱歩や横溝正史を輩出したことで知られる同誌の読者は「知識階級」に属する学生だつた。

「空で唄ふ男の話」は、都会に住む「私」が夜のカフェで一人の男と会話を交わす場面から始まる短篇だ。自分はこれまで一度も失敗したことがない「網渡り」だと言うその男は、近日催されるビルからビルへの網渡りを最後に、日本を離れる予定だと話す。危険極まりない行為だが、そのスリルを味わいたいからこそ臨むのだと男は言う。「このやうにつまらない世界が、どうして出来たのでせう。(略)僕等にとつては、こんな刺激の無い世界には、もう一刻たりとも生きてゐられない訳なのです」。こう語る男はサラリーマンではないが、彼が感じている退屈な日常への幻滅は、浅原六朗が描いた(サラリーマン)の閉塞感と同種のものだ。「或る自殺階級者」の主人公が生を実感できる「強烈な日光」を欲したように、男は約六十メートルも離れた五階建てのビルの間での「網渡り」を決行する。

「諸君、さやうなら。」といふ一声が、まるで何処かで木魂こたました程に、はつきりと碧空の彼方から響いて来た。(略)そして忽ち、彼は一枚の血潮となつて了つたのであつた。

予想どおりの最期ではある。しかしこれがこの短篇の結末ではない。語り手の「私」は最後に読者にこう告げる。この男の死体から発見された手紙には、彼は一度も網渡りをしたことがないと書かれていた。つまりこの突飛な網渡りは、衆人環視のなかで実行された「自殺」だつた、というわけだ。

この短篇が発表された一九二七年(昭和二年)は、「蒼白きインテリ」の相貌を全身に負った芥川龍之介が「ぼんやりとした不安」を遺書に残して自殺を遂げた年でもある。芥川の不安のなかには台頭を始めたマルクス主義思想の相克も含まれていたが、こうした時代的背景を考慮するならば、水谷は「プロレタリアート」から「プロレタリアート」への「網渡り」に失敗する知識人の姿を予見したともいえるだろう。

(鈴木貴宇『(サラリーマン)の文化史』による)

問一 空欄 A には直前の小説の引用部分の中の語句が入ります。空欄に入る語句と、その語句を選んだ理由を簡略に説明しなさい。

問二 傍線部 1 「プロレタリアート」から「プロレタリアート」への「網渡り」に失敗する知識人の姿とはどういうこと述べているのか。具体的な事例をあげて分かりやすく説明しなさい。

「小論文」 国語国文学科

受験番号				
氏名				

【問題二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一篇の小説が、作品全体で誘い出す歌は、私の「時」によって必ずしも同一ではない。また、私における歌と小説との関係には、一首の歌に起った心のざわめきから小説が書き起されるといふこともある。短篇の「ありてなければ」を書いた時がそう、契機になったのは古今集の、

題しらず 詠み人しらず

942世の中は夢かうつつかうつつとも夢ともしらずありてなければ
に逢った時の動揺だった。この歌に初めてつかまった時、これまで古今集をまったく読んでいなかったようなとまどいと静かな興奮を覚えた。

一首のかなめは「ありてなければ」であろう。初句から四句にかけては、かなめを導き出し、調べをととのえるための序奏の効果を読んだ。被爆以来、存在への問い、物の有無への問いを消し難くもち続けていた者に、この一首はしみわたった。凄じい歌だと思った。思弁、思考、苦吟の果てにはなく、恐らくは一瞬の直観のままにざらりと詠まれてこのような歌を収める古今集も凄じい歌集だと思った。

小説で「ない」を表現するためには、小さな、具体的な「ある」を根気よく積み重ねてゆかなければならない。その作業への勇気を新たにしながら、この一首を結論として矛盾しない小説の一つをつくるべく、私はある山中に登場人物を動かし始めた。この一首を結論とする小説は、いくつつくられてもそれで終りということはないだろう。そこがこの歌の大きさとあり頼もしさであると思われた。もしかすると、あらゆる上質の小説はこの一首に収斂されてよいのかもしれない。「ありてなし」を、「あつてない」と読んでいるうちはまだ衝撃にはならなかった。「あるからなし」と読んだ時、名前も分らない作者がそばに立ったような気分になった。

古今集には、この歌に続けて、「ありてなし」を用いたもう一首が収められている。
題しらず 詠み人しらず

943世の中にいつらわが身のありてなしあはれとや言はむあな憂とや言はむ
しかし、「ありてなし」の迫力は942の歌には及ばない。三十一音の中に、あれだけのことを表現し得るのが和歌である。

「世の中は」一首の抽象性と形而上性についてのおどろきは、具象の積み重ねとしての小説を再認識させ、小説に必要な、気の遠くなるような根気をも輝かせてくれたが、古今集を読みながら読んでいなかった私自身の時間をも容赦なく照らし出すことになった。百人一首にも、教材にも採られている古今集のあの歌の歌である。全集、叢書、大系類をまたなくても、文庫本での古今集の普及は、新古今集とともに他の勅撰集を引き離していた。古今集の歌にふれる機会は少なくともなかった。それにもかかわらず古今集を自分の目で見ていなかったと知らされたのが、「世の中は」一首につかまった時であった。

この時の感動が、受け身の感動にとどまらず、短篇創作への促しとなったことと、自分の目で確かに古今集を見たという認識とは、恐らく密接につながっている。それはほんの少しではあっても、一作者の内側に入れたらしいというよるこびの外ではなく、その快感を快感となし得たのはやはり私の「時」であったろう。

(竹西寛子『古今和歌集』より。設問の都合上、筆者による歌の現代語訳は省略した)

※ 942・943は『新編国歌大観』による『古今和歌集』の歌番号である。

問一 942番・943番の二首の歌それぞれにつき、筆者の解釈・鑑賞・評価等を踏まえ、それが明確に伝わるように現代語に訳しなさい。逐語訳である必要はなく、適宜、語順を改め、語を補うなどしてよい。

問二 筆者が「ありてなし」の迫力は942の歌には及ばない」と評価する根拠について簡潔に説明しなさい。

問三 筆者は、表現者、古典文学作品の享受者という二つの立場から論評している。筆者の意見を踏まえながら、国語科教材としての古典文学作品に関する自分の考えを述べなさい。

「小論文」 国語国文学科

受験番号					
氏名					

採点欄

【問題】

一題

問題

裏面使用可

「小論文」 国語国文学科

受験番号				
氏名				

採点欄

採点欄

【問題一】

問一

942 番歌

943 番歌

問題一

問題二

裏面使用可

ここから記入すること
↑

ここから左には記入しないこと